

草田男の真面目な滑稽（一）

飯野幸雄

十二年前、八木会長から滑稽俳句協会報のお試し版と協会入会のご案内が送られてきた。一読して面白そうだと早速会費を送金したが、創刊号、二号、三号と読む内に、自分には滑稽俳句は向かないと感じて、投句する気持ちが失せた。四角四面な性格の自分には向かないと感じたからである。

しかし、滑稽俳句は面白い。そうでなければ十二年も続けられない。そんな会員に、「論壇」に一文を寄せると八木会長からの電話である。それにしても易々と、先も見ずに引き受けたのは滑稽と言うべきか。

それで、たまたま私の書架に並んで収まっていた加藤郁乎編著の『近世滑稽俳句大全』と『中村草田男全句集』を引き抜き眺め、繙くことで論壇の一文になんとかならないかと考えた。

表題は「草田男の真面目な滑稽」である。

私が草田男の結社「萬緑」に入会したのは昭和四十五年のことで、伯父の「俳句は草田男にかぎる」との誘いがあったからだが、もうその頃の草田男の句は一読して分かるような句ではなかった。したがって滑稽とは無縁と思うのだが、敢えて挑んでみようとする次第。

そもそも「草田男の真面目な滑稽」の始まりは、草田男の俳号にある。又聞きで不正確だが、大学を何年もかけてふらふらしていた時代に、「おまえは腐った男だ」と言われて自ら「草田男」と名乗ることにしたようだ。自嘲したととれるが、案外面白がって名乗ったのではないかと私は推察する。しかも「草田男」は即座に覚えて貰える効果もあり、草田男本人は「してやったり」とほくそ笑んでいたのではあるまいか。

草田男の俳句の中で、誰もが滑稽句に分類するだろうと思われる句がある。

蟻螂は馬車に逃げられし 馭者^{ぎよしゃ}のさま
墮ち蟻螂だまつて抱腹絶倒せり

である。

草田男は吟行に出かけると、一つ場所でジッと対象物を観察して句が発想されるまで動かなかったと同人達の証言がある。

この句がそのようにして得られたかどうかは分からないが、蠘螂を凝視しなければ作り得ない観察眼が感じられる。

蠘螂の振り上げる前足をムチ振る手であると読み取り、馬車が無いにもかかわらず手を振り続ける馭者の姿におかしみを感じないわけにはいかない。

また、ひっくり返った蠘螂の腹からビヤ樽腹の男の大笑いをしている姿に仮託したことは頭の体操のできる話ではない。

草田男は、師事した高浜虚子の花鳥諷詠に長年忠実だった。その中で独自の観察句を生み出している。その多くの句は、真面目そのものであると私は感じているが、真面目であるが故にかえって滑稽さが潜んだ句があるのではないか。

独りよがりになるかも知れないが、膨大な草田男の俳句の中から、それらしい句を取り上げて紹介してみようと思う。